

驚かされる展覧会だった。熊本市中央区の崇城大ギャラリーで開かれている「いま・ここを探して…」展の会場には、25分の1の大きさのミニチュア会場模型だけがあり、その中には、さらに小さな模型とそれをながめる人物。壁には、鑑賞する人を見つめるように作家の目の映像が流れる。建造物としてのギャラリー自体を作品にし、表現しようとした試みだ。

群馬県出身。長年、舞台広告などをデザイン。2000年、崇城大芸術学部に移ったのを機に、インスタレーション（空間芸術）も手掛けるように。今回の作品は、劇作家寺山修司の演劇に影響を受けたという。「役者が観客席にいて、そこで芝居が始まった。劇場そのものを作品にしている。私たちが前提と考えていることを問いたかった」

あらためて作品を見ると、ギャラリーの中のギャラリーをのぞく自分を客観的に見ようとしたのに気付いた。予想もしなかった熊本地震で、さまざまな前提が崩れるのを体験した私たち。三枝さんは「復興途上だからこそ、時に現実を俯瞰する考え方を提案したい」と話している。

展示は20日まで。

(中原功一朗)



ギャラリーの中に、会場の模型を置き、ギャラリー自体を作品化した三枝泰之さん
熊本市中央区